

生活

✉ seikatsunews
@asahi.com



廣瀬明彦さん

闘病のグループホーム理事長 現場での体験エッセーを出版

障害のある人が暮らすグループホームの「同居人」として22年。

がんと闘いながら今も福祉の現場にいる相楽福祉会（京都府精華町）の廣瀬明彦理事長（58）がエッセー集を出した。若い職員向けに書いた文章だが、ノウハウを伝える本ではない。人が生き、人を支

えることへの根源的な問いかけに満ちている。

知的障害者の入所施設で働いていた廣瀬さんが、8人の利用者と作業所を開いたのは1981年のこと。障害のある人が施設ではなく、地域で暮らす社会をめざして、8年後には一戸建てを借り、自ら同居して支援を始めた。30年が過ぎ、作業所やグループホームなど事業所は15カ所に増えた。現在、約100人のスタッフがいる。エッセーの前身は、現場で試行錯誤を重ねた哲学だ。「働かざる

者食うべからず」という思想をどう考えるか。作業所の工賃を分配することから考えた「平等って何やる?」。そして、「自分のことはすべて自分でやるという『人』は存在するのか」という問いかけ――。

がんでの入院。外泊先も退院先も、5LDKのグループホームだった。昨年の秋、6カ所目の転移が見つかったが、障害のある人と向き合う暮らしは変わらない。

タイトルは「命と存在を支え合う 相楽福祉会の理念と実践」（税込み1260円）。書店には置いていない。問い合わせはSプランニング（電話・ファクス03・3766・1636）。

（清川卓史）

2011年(平成23年)1月20日 木曜日